

# 字余りの様相と唱詠法

——音数律の成立と関わって——

山 口 佳 紀

## はじめに

本稿の筆者は、これまで『万葉集』の和歌における字余りの様相とその意味について考えてきた。その結果については、山口佳紀 [1006A] [1006B] [1006C] [1006] を参照していただきたいが、本稿はその結果を基にして、万葉和歌における音数律の問題を考え、さらに『古事記』『日本書紀』の歌謡についても考察を加えてみたい。

## 一

まず、『万葉集』の和歌における字余りの様相について、従来の研究と私見とを紹介する。

広く知られているように、『万葉集』の和歌において、句中に単独母音（ア・イ・ウ・エ・オ）を含む句は、字余

りが許される（これまで、該当の単独母音の中にはエがなにかのごとく理解されているが、山口佳紀 [1006] で述べたように、それは誤りである）。そこで、特に重要なのは、毛利正守 [1957] 等によって、次の(a)グループと(b)グループとでは、字余りの様相に差異があることが指摘されている点である。この議論は、木下正俊 [1956] を受けて、さらに精密化されたものである。

(a)グループ 短歌の第一句・第三句・第五句／長歌の五音句・結句／旋頭歌の第一句・第三句・第四句・第六句

(b)グループ 短歌の第二句・第四句／長歌の七音句／旋頭歌の第二句・第五句

同じく句中に単独母音を含んでいる句について、字余り句になるものと、非字余り句になるものとの用例数を数え

ると、(a)グループの句は、ほとんどが字余り句になるのに対して、(b)グループの句は、字余り句も少なくはないが、非字余り句はさらに多く、字余り句のほぼ三倍に達する。

このことが何を意味するかであるが、(a)グループと(b)グループとの違いは、和歌の唱詠法と関係するのではないかと思われる。結論的にいえば、次のようなことになる(挙例には短歌を用いることにする)。

(ア) (a)グループは一般に、一句が切れ目なしに唱詠された。その場合、C V Vは一音と見なされた(Cは子音、Vは母音を表す。また、○の中の数字は短歌の何句目であるかを示す。以下同じ)。

〔例〕

いかに・あらむへ伊可安良武 (五・八一〇①)  
さきく・あれとへ佐伎久安礼等

ことにし・あるべしへ許等尔之安流倍志 (一七・三九二七③)

(五・八一〇⑤)

たとえば、「いかにあらむ」は句中に切れ目を入れず、「い」「か」「にあ」「ら」「む」と五音に数えられた。

(イ) (b)グループは、基本的には句内を二分して唱詠された。句内を二分するという時には、文構造上切れるところで音も区切るのが自然である。その場合、問題

になるC V VはC V一Vとして、二音と見なされた。

〔例〕

ころそ一いたきへ許己呂曾伊多伎

(二〇・四三〇七②)

あけむ一あしたはへ安気牟安之多波

(一八・四〇六八④)

ちかく一ありせばへ知可久安里世婆

(一五・三六三五②)

こぬ・とき一あるをへ不来時有所乎(四・五二七②)

おほ一あらきののへ大荒木野之(七・一三四九④)

あかし一おほとにへ明大門尔(三・二五四②)

ただし、切れ目の前または後に単独母音がずれる時は、C V Vが一音として扱われた。

〔例〕

とほつ一かむおやのへ等保追可牟於夜能

(一八・四〇九六②)

とり・あげ一まへに・おきへ等利安宜麻敵尔於吉

(一八・四一二九②)

のに・いで一やまに・いりへ野出山入

(二〇・一九五七④)

なお、全体が二文節であれば、一文節ずつに二分分割されるが、三文節・四文節であっても、やはり二分分割される。

また、全体が一文節であっても、やはり二分割される。  
(ウ) 同じ(b)グループであっても、二分すると音数が超過する場合は、切れ目なしに唱詠された。

〔例〕

こひつつ・あらずは〈恋乍不有者〉(四・七二六②)  
おもひし・おもはば〈於毛比之於毛波婆〉

(二五・三七六六②)

(エ) (b)グループの切れ方には、「二音一五音」「三音一四音」「四音二三音」の型があったと考えられる。

〔例〕

いざうち・ゆかな〈伊射宇知由可奈〉  
いまでも一えてしか〈伊麻勿愛豆之可〉

(一七・三九五四②)

(五・八〇六②)

まづ・なく一あさけ〈麻豆奈久安佐氣〉

(二〇・四四六三②)

なお、「五音二二音」の例は、極めて少ない。

〔例〕

よごもりて一あれ〈齒隱有〉(一一・二七七三②)  
いざり・する一あま〈伊射里須流安麻〉

(一五・三六五三②)

これは、「五音節目の第二母音以下」に単独母音が来る

と、ほとんどの場合字余り句になるという現象(毛利正守「元亮」等)と表裏の関係にある。すなわち、「五音一二音」のような切れ方を回避するために、後半の先頭が単独母音である場合には、後半が二音でなくて、三音になればよいという理屈である。

たとえば、「所見者社有」(四・七四九②)は、「みえばこそ一あれ」と読めば、「五音一二音」で切れることになるが、「みえばこそ・あらめ」と読めば、二分できない字余り句になる。そして、後者の読み方が正しい。

字余りに関する(a)グループと(b)グループとの様相の違いは、以上のように、唱詠法との関係を考えることによって、適切に解釈することができる。

## 二

ここで、「唱詠」ということについて、もう少し詳しく考えてみたい。

これまで漠然と「唱詠」という言葉を使ってきたが、音楽的な「歌唱」と、音楽から離れた「律読」とを区別したほうがよい。すなわち、和歌の歌詞を音楽に載せて歌う場合と、単にリズムをもたせて読み上げる場合とがあったと考えるのである。

和歌に音数律があるのは、「律読」を前提とするからで、

「律読」の場合は、一音の長さを一定にして、CVもCVVも同じ長さに発音したものと考えられる。ただし、CVとVとの間に切れ目が入る場合は、二音として発音されたということになる。

一方、CVを二音分にも三音分にも延ばして発音してよいならば、一句の音数を五音・七音に揃える必要はない。古代の歌が実際にどのような「歌唱」されていたかを明らかにすることは困難であるが、それを示す資料として最も古い文献は、陽明文庫蔵『琴歌譜』である。この文献は、天元四年（九八一）の書写奥書を有するが、原本の成立は九世紀前半に遡るだろうと言われている。

今、「十六日節酒<sup>のさかほひの</sup>坐歌」二首のうちの一首を取り上げると、最初の部分は、

この御酒<sup>みき</sup>は 我が御酒<sup>みき</sup>ならず 酒<sup>し</sup>の司<sup>かみ</sup> 常世<sup>とこよ</sup>に坐<sup>いま</sup>ず  
 となっている。これを原譜によって示すと、次のごとくである。

許<sup>短</sup>能<sup>於</sup>美<sup>短</sup>吉<sup>丁</sup>伊<sup>伊</sup>波<sup>阿</sup>和<sup>可</sup>阿<sup>阿</sup>美<sup>丁</sup>伊<sup>吉</sup>伊<sup>奈</sup>良<sup>後</sup>受<sup>上</sup>久  
 志<sup>能</sup>於<sup>可</sup>阿<sup>阿</sup>阿<sup>阿</sup>美<sup>伊</sup>等<sup>上</sup>許<sup>余</sup>於<sup>於</sup>ム<sup>跡</sup>伊<sup>伊</sup>万<sup>須</sup>丁

右の記号に類する文字のうち、「上」「下」は音の高低を示す。「丁」については、序文に「丁者、徐随微息之声也」とあり、文意が明確ではないが、声を次第に弱めていって最後に声を止める意らしい。また、「ム」は「m」と発音

したものとと思われる。それ以外は、音の長短を表す。

土居光知「九五」は、これについて、各行が六拍子の等長になっており、行末に一音分の停音があると考えた。土居の考えを多少修正して示すと、以下のようなになる（○は停音すなわち休止を表す）。

コノ	ーミ	キー	ーイ	ーハ	ー○
ワガ	ー	ミイ	キー	ナラ	ズ○
クシ	ノー	カー	ーア	ーミ	ー○
トコ	ヨー	ー	ムニイ	ーマ	ス○

これを見ると、途中に延音を入れて、一音が二音分・三音分に延長されている箇所がある。また、四音分・五音分になっている箇所もある。このように、途中に延音を入れて適宜に拍子を整えるならば、句の音数を五音・七音に揃える必要はないはずであって、これは飽くまでも音楽的な「歌唱」の姿を示すものと考えられる。ただし、この歌の場合、歌詞は五七調になっているから、「律読」も可能であった。

和歌が音数律をもつのは、「律読」が前提に構成されていたからであって、もし飽くまでも「歌唱」のみを前提にするものであるならば、音数律は出て来ないであろう。すなわち、和歌の音数律を考える場合には、「律読」を考え

ればよく、「歌唱」までは考えなくてもよいということになる。しかし、和歌について、「歌唱」ができないわけではなく、しようと思えば「歌唱」も可能であったと考えるべきである。

### 三

『万葉集』の和歌について考えたところは、以上のごとくであるが、『古事記』や『日本書紀』の歌謡では、どうなっているのだろうか。ここでは、『万葉集』の和歌について得られた知見を基にして、『古事記』『日本書紀』の歌謡について考えてみたい。

ただし、ここに大きな問題がある。そもそも「字余り」というのは、定型和歌に適用されるはずの概念である。ところが、『古事記』や『日本書紀』の歌謡は必ずしも定型化されていない。したがって、「字余り」という概念がそこで有効なのかどうか、先ず以て問題になるのである。そもそも、「五音句」「七音句」という捉え方が妥当なのかどうか、問題である。たとえば、次の例を見られたい。

○あめなるや (阿米那流夜) おとたなばたの (淤登多那婆多能) うながせる (宇那賀世流) たまのみすま (多麻能美須麻流) みすまると (美須麻流廻) あなだまはや (阿那陀麻波夜) みたに (美多邇) ふた

わたらす (布多和多良須) あぢしき (阿治志貴) たかひこねのかみそ (多迦比古泥能迦微曾)

(古事記・歌謡六)

末尾の「あぢしき たかひこねのかみそ」は、「あぢしきたかひこね」の部分に固有名詞であるから、「あぢしきたかひこねのかみそ」全体を一句と見ることが、あながち不可能ではない。しかし、ここは「あぢしき」「たかひこねのかみそ」として二句に切るのが普通であろう。ただし、そうだとすると、「たかひこねのかみそ」は九音あるから、七音句を大幅に超えることになる。そこで考えられることは、さらに「たかひこねの」「かみそ」と二句に切ることである。『万葉集』の長歌を見ると、字足らず句は少なくないが、句中に単独母音を含まない字余り句はさほど多くない。したがって、「たかひこねのかみそ」全体を一句と見るよりも、「たかひこねの」「かみそ」と切るほうが、考えやすい。また、『万葉集』の長歌には、「七五三終止形式」「五三七終止形式」が見られるから、「かみそ」が三音句であるというのも、特に不自然ではない。それに、右の歌謡でも「みたに」という三音句を認めるのが普通である。

○あめなるや (阿妹奈屢夜) おとたなばたの (乙登多奈婆多能) うながせる (汗奈餓勢屢) たまのみすま (多磨迺弥素磨屢迺) あなだまはや (阿奈陀磨

波夜) みたに(弥多爾) ふたわたらす(輔柁和柁羅須) あぢすきたかひこね(阿泥素企多伽避願爾)

(書紀・歌謡二)

この末尾にある「あぢすきたかひこね」も一句で、九音句と見るのが普通である。しかし、語構成から見れば、「あぢすき」「たかひこね」の二句と認めることが不可能というわけではない。上記の『古事記』歌謡六で、「あぢすきたかひこねのかみそ」を少なくとも「あぢしき」「たかひこねのかみそ」に二分するのを認めるのならば、この歌謡でも、当然「あぢすき」「たかひこね」に二分するとを是認するべきである。

なお、「たまのみすまるの」は八音句であるが、「たま(tama)」には同一母音が含まれており、万葉和歌で言えば、句中に単独母音がなくても、字余り句が生じ得るケースである。なお、万葉和歌におけるこうした問題については、山口佳紀「三四」で述べたとおりである。

それでは、次の例はどうか。

○みまきいりびこはや(美麻紀伊理毘古波夜) みまき

いりびこはや(美麻紀伊理毘古波夜) おのがをを

(意能賀衰袁) ぬすみしせむと(奴須美斯勢牟登)

しりつとよ(斯理都斗用) いゆきたがひ(伊由岐多

賀比) まへつとよ(麻弊都斗用) いゆきたがひ(伊

由岐多賀比) うかかはく(宇迦々波久) しらにと

(斯良爾登) みまきいりびこはや(美麻紀伊理毘古

波夜) (古事記・歌謡二二)

右の歌謡では、「みまきいりびこはや」という長大な一句を認めるのが普通である。しかし、「みまきいりびこ」という固有名詞には、語構成上「みまき」と「いりびこ」との間に明確な切れ目があるから、これも「みまき」と「いりびこはや」とに切つて、二句として認めることも、不自然ではない。

なお、次の歌謡には、二つの問題がある。

○やまとの(野磨等能) をむらのたけに(鳴武羅能陀

該備) ししふすと(之之符須登) たれかこのこと

(拖例柯举能居登) おほまへにまをす(飢哀磨陸備

麻鳴須) ……たくぶらに(陀俱符羅爾) あむかきつ

き(阿武柯柁都柁) そのあむを(曾能阿武鳴) あき

づはやくひ(阿柁豆波野俱譬) はふむしも(波賦武

志謀) おほきみにまつらふ(飢哀柁瀾備磨都羅符)

ながかたは(雛我柯陀播) おかむ(於柯武) あきづ

しまやまと(姁岐豆斯麻野麻登) (書紀・歌謡七五)

一つ目は、「おほまへにまをす」と「あきづしまやまと」

とが八音句になっている点である。二つ目は、「おほきみにまつらふ」が九音句とされている点である。

まず、八音句「おほまへにまをす」の問題から述べると、これを「おほまへに」「まをす」と切れば、直前の句と併せて「たれかこのこと おほまへに まをす」となり、七・五・三の形式になる。

また、九音句「おほきみにまつらふ」について言うと、毛利正守「五六」は、これを「おほきみに」「まつらふ」と切る可能性を認めながらも、「前後の脈絡からそうする必然性も考え難い」と述べている。しかし、切ってはならないという根拠も見出しがたいわけである。

さらに、八音句「あきづしまやまと」については、これを「あきづしま」「やまと」と二句に分けることが考えられる。その場合、直前の「ながかたは」と「おかむ」とを一句とすれば、「ながかたはおかむ あきづしま やまと」となって、これまた七・五・三の形式になるのである。

他にも従来、八音句と見なされている例で、二句に分けたほうがよいものがある。たとえば、次の歌謡では、末尾の「あづさゆみまゆみ」を八音句として認めるのが普通である。

○……いらなけく(伊良那那久) そこにおもひで(曾許爾淤母比伝) かなしけく(加那志那久) ここにおもひで(許々爾淤母比伝) いきらずそくる(伊岐良受曾久流) あづさゆみまゆみ(阿豆佐由美麻由美)

(古事記・歌謡五一)  
しかし、「あづさゆみ」「まゆみ」と二句に分ければ、「いきらずそくる あづさゆみ まゆみ」となり、「七五三終止形式」の一例と見ることができるのである(この点については、山口佳紀「二〇四」において論じたことがある)。

ただし、八音句というものを全く認めないほうがよいかという点、そうではない。たとえば、次の例がそれである。

○たちひのに(多遅比怒邇) ねむとしりせば(泥牟登斯理勢婆) たつごも(多都碁母々) もちてこましもの(々々知豆許麻志母能) ねむとしりせば(泥牟登斯理勢婆)

この場合、「もちてこましもの」が八音句になっている。これは、短歌形式と見られるから、「もちて」と「こましもの」とに分けることは、適切でない。ただ、この句の「ちて(三〇)」の部分に注目すると、同一子音 $t$ の間に狭母音 $i$ があるから、万葉和歌で言えば、句中に単独母音が含まれなくても、字余り句が生じ得るケースである(参照、山口佳紀「二〇四」)。

以上のように、『古事記』『日本書紀』の歌謡を問題にする場合、一句は何音から成ると考えるべきかが、まず問題である。また、従来の句切り方でよいのかどうか、検討

すべきである。しかし、実際には、七音句・五音句が基本であり時に三音句もあること、また、字足らず句は多いが字余り句は少ないこと、この二点を前提にして考えていても、それほど支障はないようである。以下、そうした見通しに立って、句中に単独母音を含む句を検討していくことにする。

#### 四

まず、『古事記』の場合を問題にする。『古事記』の歌謡には、さまざまな形式が混在しているが、最初に短歌形式を取り上げてみたい。

第一に、〈五音句〉の例は、以下のとおりである。

- いしけ・いしけ (伊斯祁伊斯祁) (五九③)
  - つき・あまし (都岐阿麻斯) (九三③)
  - しが・あれば (斯賀阿礼婆) (一一〇③)
- 字余り句が一例、非字余り句が二例で、後者のほうが多いが、用例自体が少ないため、はっきりしたことは言いにくい。
- 第二に、〈結句 (第五句)〉の例は、以下のとおりである。
- たふとく・ありけり (多布斗久阿理祁理) (七⑤)
  - さみなしに・あはれ (佐味那志爾阿波礼) (二三⑤)
  - うるはしみ・おもふ (宇流波志美意母布) (四六⑤)

- たぬしくも・あるか (多奴斯久母阿流迦) (五四⑤)
  - いしき・あはむかも (伊斯岐阿波牟加母) (五九⑤)
  - さがしくも・あらず (佐賀斯玖母阿良受) (七〇⑤)
  - つまが・いへの・あたり (都麻賀伊弊能阿多理) (七六⑤)
  - みえずかも・あらむ (美延受加母阿良牟) (一一二⑤)
  - ◎いりたたず・あり (伊理多々受阿理) (二〇七⑤)
- 字余り句が八例、非字余り句が一例で、前者のほうが圧倒的に多い。すなわち、〈結句 (第五句)〉については、万葉短歌とあまり変わりがないような状態になっている。

第三に、〈七音句〉の例は、以下のとおりである。

- まける一あをなも (麻祁流阿袁那母) (五四②)
  - にし・ふき一あげて (爾斯布岐阿宜豆) (五五②)
  - もゆる一いへむら (毛由流伊弊牟良) (七六④)
  - しび・つく一あまよ (斯毘都久阿麻余) (一一〇②)
  - あふみのおきめ (阿布美能淤岐米) (一一二②)
- 字余り句の例はなく、全五例はすべて非字余り句であり、二分可能である。すなわち、〈七音句〉も、万葉短歌と変わりがない。
- 以上、短歌形式のものは、万葉短歌と比べた時、はっきりした違いは出て来ない。
- 次に、長歌形式のものを検討する。ここで「長歌形式」



と呼ぶのは、七句以上の歌謡のことである。

第一に、〈五音句〉の例は、以下のとおりである。

- わが・おほきみ (和賀意富岐美) (二八長五)
  - みぐひうちが (韋具比字知賀) (四四長五)
  - うきし・あぶら (字岐志阿夫良) (九九長五)
  - ひろり・いまし (比呂理伊麻志) (二〇〇長五)
  - あさあめの (阿佐阿米能) (四四長五)
  - き・いり・をり (岐伊理袁理) (一一〇長五)
  - てり・いまし (豆理伊麻斯) (五七長五)
  - はらに・ある (波良邇阿流) (六〇長五)
  - うちの・あそ (字知能阿曾) (七一長五)
  - しが・あまり (斯賀阿麻理) (七四長五)
  - ふな・あまり (布那阿麻理) (八五長五)
  - その・あむを (曾能阿牟袁) (九六長五)
  - てり・います (豆理伊麻須) (二〇〇長五)
  - を・ゆき・あへ (袁由岐阿閉) (二〇一長五)
- 字余り句が四例、非字余り句が一〇例で、後者のほうが多い。すなわち、〈五音句〉については、万葉長歌と異なって、字余り句が多くない。
- 第二に、〈結句 (第五句)〉の例は、以下のとおりである。
- いま・うたば・よらし (伊麻宇多婆余良斯) (二〇長結)

- あやに・うただのし (阿夜邇宇多陀怒斯) (四〇長結)
- あひ・おもはず・あらむ (阿比淤母波受阿良牟) (六〇長結)

○しらずとも・いはめ (斯良受登母伊波米) (六一長結)

○わぎへの・あたり (和芸弊能阿多理) (五八長結)

○き・いり・まる・くれ (岐伊理麻韋久礼) (六三長結)

字余り句が四例、非字余り句が二例で、字余り句のほうが優勢である。例が少ないため、はっきりしたことは言いにくいだが、万葉長歌と似た傾向にある。

第三に、〈七音句〉についてであるが、二分可能な非字余り句、および二分可能な字余り句は以下のとおりである。

- なすや・いたとを (那須夜伊多斗遠) (二長七)
- わどりに・あらめ (和杼理邇阿良米) (三長七)
- わが・むれ・いなば (和賀牟礼伊那婆) (四長七)
- わが・ひけ・いなば (和賀比氣伊那婆) (四長七)
- みの・おほけくを (微能意富邪久袁) (九長七)
- あれは・おもへど (阿礼波意母閉杼) (二七長七)
- ひとに・ありせば (比登邇阿理勢婆) (二九長七)
- とこよに・います (登許余邇伊麻須) (三九長七)
- いづくに・いたる (伊豆久邇伊多流) (四二長七)
- かづき・いきづき (迦豆伎伊岐豆岐) (四二長七)
- わが・いませばや (和賀伊麻勢婆夜) (四二長七)

- はだ一あ。からけみ (波陀阿可良氣美) (四二長七)
- まひには一あ。てず (麻肥瀨波阿弓受) (四二長七)
- よさみの一い。けの (余佐美能伊氣能) (四四長七)
- かみし一お。ほみき (迦美斯意富美岐) (四八長七)
- きみを一お。もひで (岐美袁滌母比伝) (五一長七)
- いをも一お。もひで (伊毛袁滌母比伝) (五一長七)
- そこに一お。もひで (曾許爾滌母比伝) (五一長七)
- ここに一お。もひで (許々爾滌母比伝) (五一長七)
- ひろり一い。ますは (比呂理伊麻須波) (五七長七)
- なが一い。へせこそ (那賀伊弊勢許曾) (六三長七)
- たちか一あ。れなむ (多知迦阿礼那牟) (六四長七)
- すがはら一と・い。はめ (須宜波良登伊波米) (六四長七)
- わが・とふ一い。もを (和賀登布伊毛袁) (六四長七)
- うつや一あ。られの (宇都夜阿良礼能) (七八長七)
- たたみと一い。はめ (多々美登伊波米) (七九長七)
- いくみだけ一お。ひ (伊久美陀氣滌斐) (八五長七)
- たしみだけ一お。ひ (多斯美陀氣滌斐) (九〇長七)
- その一お。もひづま (曾能滌母比豆麻) (九〇長七)
- わが一お。ほきみの (和賀滌富岐美能) (九六長七)
- あぐらに一い。まし (阿具良爾伊麻志) (九六長七)
- わが一お。ほきみの (和賀意富岐美能) (九七長七)

- あづまを一お。へり (阿豆麻袁滌弊理) (九九長七)
  - みづたま一う。きに (美豆多麻宇岐爾) (九九長七)
  - わが一お。ほきみの (和賀滌富岐美能) (一〇三長七)
- それに対して、字余り句は、以下のとおりである。これは、二分不可能な例である。

- ◎などりに・あ。らむを (那籽理爾阿良牟遠) (三長七)
  - ◎あが・お。ほくにぬし (阿賀滌富久邇奴斯) (五長七)
  - ◎いその・さき・お。ちず (伊蘇能佐岐滌知受) (五長七)
  - ◎となかの・いくりに (斗那加能伊久理爾) (七四長七)
- すなわち、二分可能な非字余り句・字余り句が三五例あるのに対して、二分不可能な字余り句は四例しかない。前者が圧倒的に多く、万葉長歌と類似した傾向にある。
- ただし、次の例は六字句で、単独母音を含んでいながら、字足らず句になっている。これらは、次のように二分したとしても、「七音句」としては、一音分足りないことになる。
- ※めにし一あ。れば (売邇志阿礼婆) (三長七)
  - ※よは一い。でなむ (用波伊伝那牟) (三長七)
  - ※そに・ぬき一う。て (曾邇奴岐字弓) (四長七)
  - ※そに・ぬき一う。て (曾邇奴棄字弓) (四長七)
  - ※なは一い。ふとも (那波伊布登母) (四長七)
  - ※をに一い。ませば (遠邇伊麻世婆) (五長七)

※めにし一あれば(売邇斯阿礼婆) (五長七)

※いせのう。みの(伊勢能宇能能) (一三長七)

※うちし一おほね(宇知斯淤富泥) (六一長七)

※うちし一おほね(宇知斯意富泥) (六三長七)

※いくひをう。ち(伊久比袁字知) (八九長七)

※まくひをう。ち(麻久比袁字知) (八九長七)

※あがもふ一いも(阿賀母布伊毛) (八九長七)

※なにお。はむと(那爾於波牟登) (九六長七)

※あめを。お。へり(阿米袁淤弊理) (九九長七)

※ひなを。お。へり(比那袁淤弊理) (九九長七)

※えのう。らばは(延能宇良婆波) (九九長七)

※えのう。らばは(延能宇良婆波) (九九長七)

※えのう。らばは(延能宇良婆波) (九九長七)

しかも、全一九例あつて、その数はかなり多いと言える。

これは、万葉長歌とは異なる点である。

以上、『古事記』の長歌形式について見ると、全体として万葉長歌に似た点があるが、 $\langle$ 五音句 $\rangle$ では、字余り句よりも非字余り句が優勢であるという点、万葉長歌とは異なっている。また、 $\langle$ 七音句 $\rangle$ では、句中に単独母音を含みながら字足らず句になっているものが多いという点、万葉長歌とは異なる点である。

右に取り上げた短歌形式・長歌形式以外に、三句形式

(片歌形式)・四句形式・五句形式(短歌形式以外)・六句形式があるが、それぞれ用例が少ないので、省略することにする。

### 五

次に、『日本書紀』の歌謡について取り上げてみる。まず、短歌形式から見えていく。

第一に、 $\langle$ 五音句 $\rangle$ は次の一例しかない。

○ひとは・いへど(比鄩播伊珮耐) (六③)

これは字余り句であるが、一例しかないため、傾向を捉えることができない。

第二に、 $\langle$ 結句 $\rangle$ の例は、以下のとおりである。

○たふとく・ありけり(多輔妬勾阿利計利) (六⑤)

○さみなしに・あはれ(佐微那辞珂阿波礼) (二〇⑤)

○その・こは・ありけめ(曾能古破阿利鷄梅) (四八⑤)

○あに・よくも・あらず(阿珂予区望阿羅儒) (四九⑤)

○いしき・あはむかも(伊辞枳阿波牟伽茂) (五二⑤)

○みえずかも・あらむ(弥曳掃智謨阿羅牟) (八六⑤)

○あはむとぞ・おもふ(阿波夢登茹於謀賦) (八九⑤)

○あひ・おもはなくに(阿避於謀婆儺俱備) (九三⑤)

◎その・ねは・う。せず(曾能泥播字世儒) (八三⑤)

字余り句が八例、非字余り句が一例で、前者のほうが圧

倒的に多い。これは、『古事記』の場合と同様であり、また、万葉短歌と同じ傾向にある。

第三に、〈七音句〉の例は、以下のとおりである。

- ひかりは一ありと(比叻利播阿利登) (六②)
- いつきが一うへの(伊菟岐餓字倍能) (六④)
- くもの一おこなひ(区茂能於虚奈比) (六五④)
- きみも一あへやも(积弥母阿閉椰毛) (六八②)
- なびき一おき・たち(儼弼企於己陀智) (八三④)
- あふみの一おきめ(阿甫弥能於岐每) (八六②)
- なを一あましじみ(儼鳴阿摩之耳弥) (九〇④)
- みおびの一しつはた(瀾於寐能之都波扠) (九三②)
- こたち一うすけど(虚多智于須家苜) (一〇五②)
- たぐへる一いもを(陀虞陞屢伊慕乎) (一一三④)
- うつくし一いもが(于都俱之伊母我) (一一四④)
- をむれが一うへに(乎武例我禹杯爾) (一一六②)
- わかく一ありきと(倭柯俱阿利岐騰) (一一七④)
- いまきの一うちは(伊麻紀能禹知播) (一一九④)
- ◎いしかず・あらまし(伊志歌孺阿羅麻志) (一一九④)

(八一・一本云④)

二分可能な非字余り句・字余り句は一四例、二分不可能な字余り句は一例であつて、『古事記』の場合とほぼ同様であり、万葉短歌と同じ傾向を示している。

次に、長歌形式のものを検討する。「長歌形式」と呼ぶのは、やはり七句以上の歌謡のことである。

第一に、〈五音句〉の例は、以下のとおりである。

- いせの・うみの(伊斉能于瀾能) (八長五)
  - おほいしにや(於費異之珥夜) (八長五)
  - うべな・うべな(于陪儼于陪儼) (六三長五)
  - ◎しが・あまり(之餓阿摩離) (四一長五)
  - ◎うちの・あそ(宇知能阿曾) (六二長五)
  - ◎ふなあまり(布儼阿摩利) (七〇長五)
  - ◎その・あむを(曾能阿武鳴) (七五長五)
- 字余り句が三例、非字余り句が四例で、後者が多くらいであるが、これは『古事記』の場合と同様である。また、万葉長歌とは異なっている。さらに、次のごとく、四字句であり、かつ句中に単独母音を含むものが、二例存する。
- ※いぎ・あぎ(伊装阿芸) (二九長五)
  - ※いぎ・あぎ(伊装阿芸) (三五長五)
- 第二に、〈結句〉の例は、以下のとおりである。
- いぎ・あはな・われは(伊装阿波那和例波) (二八長結)
  - あやに・うただぬし(阿椰珥于多娜濃芝) (三三長結)
  - しらずとも・いはめ(辞羅孺等茂伊波梅) (五八長結)
  - あきづしまと・いふ(姍岐豆斯麻登以符) (二八長結)

(七五・一本云長結)

○あやに・うらぐはし(阿野備于羅虞波斯)(七七長結)  
○その・たびと・あはれ(諸能多比等阿波礼)

(一〇四長結)

○いや・う。こにして(伊夜于古珥辞氏) (三六長結)  
○わぎへの・あたり(和芸幣能阿多利) (五四長結)

○き・いり・まる・くれ(企以利摩章区例)(五七長結)

○かげひめ・あはれ(柯寻比謎阿婆例) (九四長結)

字余り句が六例、非字余り句が四例で、前者のほうが優勢であるが、両者の開きは顕著でない。その点、『古事記』

の場合とも、万葉長歌とも、やや違っているが、そもそも

用例数自体が少ないから、はつきりしたことは言いにくい。

第三に、〈七首句〉についてであるが、二分可能な非字

余り句・字余り句は以下のとおりである。

○みの一おほけくを(未廻於朋鷄句鳩) (七長七)

○ひとに一ありせば(比苔珥阿利勢摩) (二七長七)

○いざ・あはな一われは(伊装阿波那和例波)

(二八長七)

○いたて一おはずは(伊多氏於破孺破)

○とこよに一います(等虚予珥伊麻輪) (三二長七)

○よさみの一いけに(予佐瀾能伊戒珥) (三六長七)

○かめる一おほみき(伽綿蘆淤朋瀾枳) (三九長七)

○たされ一あらちし(多佐例阿羅智之) (四〇長七)

○きびなる一いもを(吉備那流伊慕鳩) (四〇長七)

○きみを一おもひで(枳瀾烏於望臂涅) (四三長七)

○いもを一おもひで(伊暮烏於望比涅) (四三長七)

○なが一いへせこそ(儺餓伊幣奇虚曾) (五七長七)

○わが一おほきみは(和我於朋枳瀾波) (六三長七)

○たたまと一いはめ(哆多瀾等異津梅) (七〇長七)

○あごらに一いまし(阿娼羅備伊麻伺) (七五長七)

(七五・一本云長七)

○わが一おほきみの(倭我飢哀枳瀾能) (七六長七)

○たたき一あざはり(多々企阿蔵播梨) (九六長七)

○いまだ一いはずて(伊麻娜以播孺底) (九六長七)

○みもろが一うへに(美母廬我紆陪備) (九七長七)

○いはれの一いけの(以簸例能伊開能) (九七長七)

○わが一おほきみの(倭我於朋枳美能) (九七長七)

○ささらの一みおびの(娑佐羅能美於寐能) (九七長七)

○わが一おほきみの(和餓於朋者瀾能) (一〇二長七)

○つめの一あそびに(都梅能阿素弭爾) (二四長七)

○たまでの一いへの(多麻提能伊鞞能) (二四長七)

○くいは一あらじぞ(俱伊播阿羅珥茹) (二四長七)

また、二分可能な字余り句は以下のとおりである。

○となかの・いくりに(斗那訶能異句離珥) (四一長七)

◎あやに・うらぐはし（阿野備于羅虞波斯）（七七長七）  
◎その・たびと・あはれ（諸能多比等阿波礼）

（二〇四長七）

すなわち、二分可能な非字余り句・字余り句が二六例あるのに対して、二分不可能な字余り句は三例しかない。この点、『古事記』の場合や万葉長歌の場合と同一の傾向を示している。

しかし、以下のような六字句が一三例あり、句中に単独母音を含みながら、字足らず句になっている。これらは、二分したとしても、一音分足りないことになる。

※き・いり一をりとも（枳伊離烏利苔毛）（九長七）

※うちの一あそが（于池能阿層餓）（二八長七）

※いさご一あれや（異佐誤阿例椰）（二八長七）

※うちの一あそが（于知能阿曾餓）（二九長七）

※そこに一おもひ（曾虚珥於望比）（四三長七）

※ここに一おもひ（虚々珥於望臂）（四三長七）

※うちし一おほね（于智辞於朋泥）（五七長七）

※うちし一おほね（于智辞於朋泥）（五八長七）

※わが一いませば（倭我伊麻西麼）（七五長七）

※なに一おはむと（難備於婆武登）（七五・一本六長七）

※わが一いのちも（倭我伊能致謀）（七八長七）

※ひの一いたとを（避能伊陀凶鳴）（九六長七）

※われ一いりまし（倭例以梨魔志）（九六長七）

こうした例が多いのは、『古事記』の場合と同様であるが、万葉長歌とは異なる点である。

なお、短歌形式・長歌形式以外にも、さまざまな形式があるが、それぞれの用例が多くないので、ここでも省略する。

以上、『古事記』『日本書紀』の短歌形式・長歌形式に対して検討を加えた。

まず、短歌形式についてであるが、これは万葉短歌と違つた点は特に見られない。すなわち、『古事記』『日本書紀』の短歌形式と万葉短歌とは、音形式において、ほとんど同一のものと認めてよい。したがって、それらは「律読」を前提にして形成されたものと見られる。

次に、長歌形式についてであるが、万葉長歌と類似はしているが、〈五音句〉において非字余り句が多いこと、ならびに〈七音句〉において字足らず句が多いことが顕著な違いである。ただし、五音句・七音句を基本としているように見えること、また〈結句〉はほとんど字余り句になっていることからすると、『古事記』『日本書紀』の長歌は、「律読」によつて音の長さを一定化する方向にあつたと思われる。したがって、右に指摘した〈五音句〉における非字余り句、および〈七音句〉における字足らず句は、延音

によつて音の長さを一定化していたと解すべきであろう。その点で、万葉和歌の前段階にあつたと言えるのではなからうか。

### おわりに

『古事記』『日本書紀』の歌謡と言われているものは、案外『万葉集』の和歌に近い点が認められる。それは、『記』『紀』の歌謡が「歌唱」のみを前提に歌が作られた時代に形成されたものではなく、「律読」を前提として歌が作られた時代に入つてから、形成されたものだからであろう。それらを「歌唱」することはできたであろうが、「律読」もまた可能であつたはずである。

『古事記』『日本書紀』の歌謡と『万葉集』の和歌との関係は、こうした面からもさらに追究される必要がある。

### 引用論文

木下正俊 〔二六六〕「準不足音句考」(万葉二六号)

土居光知 〔二六七〕『言葉と音律』(研究社出版)

毛利正守 〔二六九〕「万葉集に於ける単語連続と単語結合体」

(万葉一〇〇号)

毛利正守 〔二六九〕「記紀歌謡における句の音節―結句を中心

に―」(神田秀夫先生喜寿記念) 古事記・

日本書紀論集(統群書類従完成会)

山口佳紀 〔二〇四〕『万葉集』における「非単独母音性の字余

り句」について」(万葉一八六号)

山口佳紀 〔二〇六〕『万葉集』における短歌の訓法と字余り

―短歌第一・三・五句の場合―」(高岡市

万葉歴史館紀要一六号)

山口佳紀 〔二〇六〕『万葉集』の字余りから見た短歌の唱詠

法(論集上代文学第二十八冊)

山口佳紀 〔二〇六〕『万葉集』における短歌の字余りと唱詠

法―二文節から成る第二句・第四句を中心

に―」(万葉集研究第二十八集)

山口佳紀 〔二〇七〕『万葉集』における字余りの様相と唱詠法

―短歌第二句・第四句全般を問題として

―」(論集上代文学第二十九冊)